

第21回 チョウ類の 保全を 考える 集い



【お申し込みはこちらから】



2月8日(土) 13:00~17:45(開場12:30)

オンライン開催(Zoomウェビナー)
参加費・参加要件: なし

お申込み先

https://us06web.zoom.us/webinar/register/WN_Dva3uCuQSF6ZkBX94XS8fg

参加には前日までの事前登録が必要です。早めの登録をお願いいたします。

インターネットに接続できるコンピュータまたはスマートフォンが必要です。
当日までにZoomアプリをコンピュータまたはスマートフォンにインストールする必要があります。

当日、閉会後にオンライン懇親会を実施する予定です。詳しくは、ご参加登録をいただいた皆様に後日ご連絡いたします。

オンライン参加がご不安な会員の方には事前に接続のサポートをさせていただきます。お気軽に事務局までご連絡ください。

第一部 ネオニコチノイド系農薬による昆虫類への影響

荻部治紀氏(神奈川県立生命の星・地球博物館)

ネオニコチノイド系農薬のために水田からアキアカネが消えたことはよく知られています。しかしこの農薬は、現在、水田・畑地・果樹園ばかりでなく、家庭の害虫駆除でも使われており、昆虫類に与える影響は農地にとどまらず、多くの環境で深刻になっています。この問題について先進的な調査を進めてこられた荻部治紀氏から、深刻な現状と、今後考えるべき方向性についてご紹介をいただきます。



第二部 昆虫類の現状と保全の取り組み

気候変動に伴うギンボシヒョウモンの生息状況の変化

渡邊通人氏(富士山生物多様性研究室・甲州昆虫同好会)

富士山周辺ではギンボシヒョウモンの生息地が標高の高い場所に移動していることをご紹介いただきます。気候変動が自然界に与える影響の事例として、北方系のチョウの分布の変化が明らかにされた事例です。

長野県の農地景観で取り組むミヤマシジミの保全

出戸秀典氏(ミヤマシジミ里の会事務局・飯島町地域おこし協力隊)

近年、急激に減少したミヤマシジミは、河川に生息することで知られていますが、かつては田畑の畦にも広く生息していました。飯島町全体を巻き込んだ保全の取り組みを、ご紹介いただきます。

水生昆虫の保全と今後の展望

橋口功大氏(東京大学)

ますます激減しているマルコガタノゲンゴロウやシャープゲンゴロウモドキをはじめとした水生昆虫の現状を、全国的な視点から整理したうえで、外来種対策の課題や、今後の展望をご紹介いただきます。

第三部 チョウ類のモニタリング調査

自然環境の現状や変化を知る取り組みとして、当協会ではトランセクト調査と庭のチョウ類調査を進めています。トランセクト調査は、「ヨーロッパチョウ類モニタリングスキーム」という国際的なプロジェクトに参画して、実施しています。今回はお二人の方に、調査で明らかになったことをご紹介いただきます。そのうえで、トランセクト調査の3年分を解析した結果についてご紹介いただきます。

ビジターセンターで行っているチョウ類のトランセクト調査

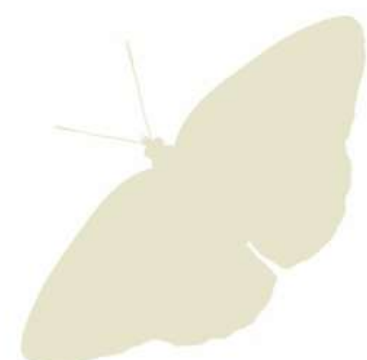
坂内美佳氏(網張ビジターセンター)

京都の緑地におけるチョウのモニタリング調査－8年間の結果－

井村 治氏(日本チョウ類保全協会会員)

モニタリング調査全体の結果と解析について

小長谷達郎氏(奈良教育大学)、内海 邑氏(日本大学)、徳嶋賀彰氏(奈良教育大学)



第四部 絶滅危惧のチョウ・昆虫類の活動報告

ヒメチャマダラセセリ、フサヒゲルリカミキリ、ヒョウモンモドキ、ツシマウラボシシジミ、アカハネバツタ等